

## 〈研究ノート〉

# 関学レインボーウィークが提示するLGBT施策のあり方<sup>1</sup>

小林 和香・飯塚 諒・武田 丈・北山 雅博

## 1. はじめに

近年、東京都の渋谷区の同性パートナーシップ証明書や世田谷区の同性パートナー宣誓書の発行の開始、また大阪市淀川区のLGBT支援事業に見て取れるように、日本国内でもLGBT (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender) などの性的マイノリティへの社会的な関心が高まり、取り組みが行われるようになってきている。こうした流れを受けて、大学や学校におけるLGBTなどの性的マイノリティ（以下、LGBT）の学生や生徒に関する現状や支援に関する研究も次第に行われるようになってきた。こうしたものの中には、LGBT学生の抱える課題の把握（佐倉，2010；河嶋，2015）、大学内での取り組み（日高，2014a；加藤，2008；魚橋，2009；ヨシノ，2007）、教師の意識（日高，2014b）などに関するものなどがある。関西学院大学においても、2013年度より人権教育研究室が主催して「関学レインボーウィーク」を開催し、キャンパス内でのLGBTに対する「風土」や「制度」の改革を目指す取り組みが行われている。本稿では、この関学レインボーウィークのあゆみを振り返ることで、本キャンパスにおけるLGBT学生の現状を理解するとともに、本学の今後のLGBT施策の課題を検討していく。

## 2. 関学レインボーウィークの誕生（2013年度）

関西学院大学では、毎年春と秋に開催される大学主催人権問題講演会の中で、2006年度春の尾辻かな子氏（当時、大阪府議会議員）による性的マイノリティの人権についての講演会以降、毎年のようにLGBTをテーマとしたものを開催してきた。また教育活動としても、2003年度より全学共通科目である総合コースとして「ヒューマン・セクシュアリティー性の「常識」を問い直す」という授業科目を開講し、2009年度以降はこの科目を「人権教育科目」と位置付け、「セクシュアリティと人権」に授業名を変更して提供している。

こうした取り組みは、本学の学生や教職員のLGBTに関する知識や関心を高める一定の効果はあったが、学外からの講師による講演会や授業では、セクシュアリティやLGBTに関連する課題がどこか「他人事」として捉えられることが少なくなかった。そこで、学生や教職員に、こうした課題がキャンパス内にも存在し、学生や教職員にとって非常に身近で、すべての構成員が向き合うものであると認識してもらうことを目的に開催されたのが、2013年5月17日（金）の15：15から18：00にかけて図書館ホールで開催されたトークセッション「関学の中のセクシュアルマイノリティ：すべての人が自分らしく振る舞える学びの共同体を目指

1 本稿は、2015年度人権教育研究室公募研究「キリスト教主義大学におけるLGBTの学生に対する人権保障の取り組み調査」（代表者：榎本てる子 神学部准教授）の助成を受けて実施した研究の一部をまとめたものである。

して」と、5月13日(月)から17日(金)にかけて図書館エントランスホールで開催されたパネル展であった。

- (1) トークセッション「関学の中のセクシュアルマイノリティ：すべての人が自分らしく振る舞える学びの共同体を目指して」

登壇者：桃助(当時関西学院大学現役生)

吉川寛(2012年度総合政策学部卒業生)

小林和香(2007年度総合政策学部卒業生)

長谷川馨(2012年度人間福祉学部卒業生)

司会・進行：武田丈(人権教育研究室)

国際反ホモフォビア・トランスフォビアの日(IDAHOT = International Day Against Homophobia and Transphobia)である5月17日に合わせて開催されたトークセッションでは、現役学生・卒業生4名の性的マイノリティ当事者が登壇し、自身の経験を踏まえて「関学／キャンパス」における多様なセクシュアリティに対する無理解や無関心の「風土」について語った。たとえば、キャンパス内で同性愛をテーマにした冗談が何気なくかわされ、それが見過ごされるという風土が、LGBTの学生たちを傷つけ、キャンパス内でのカミングアウトを困難にしていることが明らかにされた(阿部, 2014)。また参加者たちに、そうした風土を醸成しているキャンパスの構成員であるということをより実感してもらうために、参加者に小グループに分かれてもらい、それぞれのグループに登壇者が一人ずつ入って直接話し合うことで、日頃さして問題とは感じられない「風土」が、実のところ性的マイノリティたちを苦しめているということをより深く理解してもらった。

- (2) パネル展

パネル展ではLGBTの基礎知識、また当事者やその周囲の人のメッセージが書かれた「いのちリスペクト。ホワイトトリボン・キャンペーン」のパネル8枚の展示と、関学卒業生の同性カップルの写真展、そして「関学生の声」が展示された。

同性カップルの買い物やカラオケといった普段の様子を写した写真展について、来場者からは「関学に性的マイノリティのカップルがいるということに衝撃を受けて興味をもちました」、「私たちとそんなに変わらない日常を送っていて安心した」、「自分は当事者なので世の中は偏見だらけだと思っていたが、こういったパネル展で理解を広めていけるかもしれないと思った」などの感想があり、来場者にLGBTを身近な存在であることを認識してもらう効果とともに、当事者が顔を出すことで関学内の当事者の学生たちに対して「一人じゃないと実感できた」などLGBT学生のエンパワメントに効果があったことも確認できた。

「関学生の声」は本イベントを開催するにあたり、有志が集まった卒業生が学校に望むことをまとめた資料である。ポスターの設置や、入学式での広報など具体的な要望が上がる中、最も大学に求めることは「風土の変化」だった。なぜなら、いくら大学の制度を変えても、キャンパスの風土が変わらなければ、そうした制度を利用することが困難だからである。

### 3. 関学レインボーウィーク2014「もっとカラフルな関学に！」

2013年度の取り組み終了後、参加者たちからこの取り組みを恒例行事にしたいという声があり、毎年IDAHOTに合わせて「関学レインボーウィーク」として開催されることが人権教育研究室で了承され、2014年度は5月12日から16日かけて開催された。

- (1) リーフレットとレインボーステッカーの配布およびレインボーフラッグの掲揚

2013年度の取り組みの中で明らかになったキャンパス内の風土の変革を目指して行われたのが、ウィークの趣旨やプログラムを載せたリーフレットとレインボーステッカーの教職員関係者全員への配布であった(阿部, 2015)。このレインボーステッカーは、キャンパス内でのLGBTへの理解や

共感を可視化することを狙って実施したもので、ウィーク終了後も教職員が自分の研究室のネームプレート、メールボックス、ノートブック PC、手帳、スマートフォンなどに貼っている光景がキャンパス内で確認された。また、ウィーク中には西宮上ヶ原キャンパスの正門と神戸三田キャンパスのアカデミックコモンズ前に1週間にわたりレインボーフラッグを掲げた。これもキャンパス内でレインボーウィークを開催していることを可視化し、毎朝通勤・通学する人たちに少しでも関心を持ってもらったり、考える機会を提供するための試みであった。

## (2) パネル展

図書館のエントランスホールで2014年5月12日(月)から16日(金)にかけて開催したパネル展では、前年度にも展示した「いのちリスペクト。ホワイトリボンキャンペーン」のパネルに加えて、「KG RAINBOW PROJECT～教員・職員・卒業生からのメッセージをあつめました～」を実施した。これは、教職員に書いてもらったキャンパス内のセクシュアリティの多様性に関する支持的なメッセージとともに、その教職員の顔写真を展示するというものであった。来場者からは、「普段は授業や研究をされている先生方もさまざまな考えも持っていることがわかった」、「自分の学部の先生のメッセージがあったので真摯に受け止められた」などの感想が寄せられた。また当事者の学生からも、「この企画があることで安心できます」、「関学に来てよかった」、「教職員によるメッセージにより、いつも講義をしてくださる教授も味方なんだと思えた」という声も寄せられた。こうした感想からは、啓発の対象である人たちの身近な存在である教職員が「LGBTフレンドリーであることをカミングアウトする」ことの効果が強く感じられた。2013年に実施したカップルの写真展に対しては、「カップルが幸せそうだった」や「堂々と自分らしく暮らせる社会がいいと思う」などの感想が寄せられたが、教職員のパネル展の感想に比べると客観的な感想が多かった。それと比較すると、教職員からのメッ

セージに対しては、共感を示す感想が多かった。学校側のアクションを見える形にすることで、LGBTに全く関心のなかった学生のパネルへの興味を高め、キャンパス内の風土を変えていく礎になったのではないかと考えられる。

## (3) 映画『Call Me Kuchu ウガンダで、生きる』 (2012年 米国・ウガンダ) 上映会

5月12日(月)の15:10から図書館ホールで開催した映画上映会には、学生、教職員、学外者など50名が参加した。同性愛が罪となるウガンダの現状をとらえたドキュメンタリー映画だったため、参加者の関心が国内のLGBT事情に向くのか懸念されたが、鑑賞者へのアンケートを見てみると、今後取り上げてほしいテーマや題材として「日本でのLGBTの実態を知るようなものをぜひ紹介してほしい」や「日本の性的マイノリティについても知りたいと思った」があがっており、ウガンダの状況を通して日本の状況に興味関心を持ってくれたことを示す感想が多くあった。

## (4) パネルセッション&座談会「第2回 関学の中のセクシュアルマイノリティ：ひとりひとりの立場でできること」

登壇者：広輔（当時神戸女学院大学4年生）

りく（当時同志社大学3年生）

山本彩加（当時総合政策学部4年生）

白石朋也（当時立命館大学color-free元代表、4年生）

小林和香（2008年度総合政策学部卒業）

5月15日(木)の15:10から関西学院会館「光の間」で開催されたパネルセッション&座談会には、他大学のLGBTサークルの学生3名と、本学のアライ（性的マイノリティの理解者・支援者）の学生1名が登壇し、本学卒業生がファシリテーターを務めた。参加者は合計80名で、学外からも7名の参加があった。前年度の企画とは異なり、アライの学生が登壇したことが、参加者からの「同じ年代の学生として“知らなかったこと”への差を感じました」という感想に見られるように、性的マイノリ

ティのことを知らない、受け入れられない自分自身を省みるきっかけになったという参加学生からの声が寄せられた。

#### (5) 交流会 (非公開イベント)

5月16日(金)に開催した、当事者やアライの学生を対象とした交流会には総勢18人の参加があった。内訳は学生7名、卒業生3名、関学以外の学生4名、教員1名、その他3名である。学内のLGBTサークルが毎年インターネットや張り紙などで当事者学生のイベントを呼びかけても年間数名程度からしか連絡がないことと比較すると、18人の参加者が集まったというのは大成功だったと考えられる。主催が大学であったことに加え、非公開にしたことで安心して参加できたことが要因であろう。実際、終了後回収したアンケートには「学校が開いている交流会なら、安心して参加できる」、「身近なところに味方がいると思えて安心した」というような感想が多く寄せられた。普段のランチ会(セクシュアリティを隠さず安心して昼休みを過ごす場所の提供)の存在を知らなかったり、LGBTサークルに足を運ぶことができない学生に向けて、関学レインボーウィークをきっかけに情報を発信していく手段として有効だと考えられる。

#### (6) ゲリラライブ (非公式イベント)

上記の公式な行事以外に、ウィークの非公式イベントとして、5月15日(木)の昼休みには、学生・教員・職員・その他の有志たちによる中央芝生でのライブ演奏が開催された(阿部, 2015)。ウィークのテーマである「もっとカラフルな関学に!」に見合う楽曲を選び、集まった人たちの間で合唱がなされたライブには、生憎の小雨まじりの天候にもかかわらずSNSなどを通じてイベントを知った多くの人が集い、関学の中のウィークの取り組みを可視化させ、通りがかった学生や教職員にキャンパスがもつ風土を再考させるきっかけを提供することができた。

#### 4. 関学レインボーウィーク 2015「誰にとっても、いきやすい関学に!」

過去2年間の取り組みでは、LGBT学生や卒業生に登壇してもらいパネルディスカッションを開催し、LGBTをキャンパス内の課題や身近な問題として考える機会を提供し、風土を変える礎を築くのに一定の効果があつた。しかし、こうしたセッションへの参加者が限定されていたり、もともと関心や知識を有している学生や教職員が参加していることが少なくなかったことに加え、当事者が顔を出して体験談を話す負担を考慮し、2015年度はパネルディスカッションではなく、別の形の啓発活動に展開するとともに、キャンパスの風土や制度を変革していくのに必要なキャンパス内でLGBT学生が直面する課題を明らかにしていくことに主眼をおいて、2015年5月11日(月)から15日(金)まで開催された。

##### (1) 前年度から引き続き実施した取り組み

レインボーフラッグの掲揚に関しては本数を増やし、リーフレットは内容を改定するとともに、本学には日本語を母語としない留学生や教職員も多いため、今年度から日本語版に加えて英語版を作成して、レインボーステッカーとともに全教職員(非常勤講師含む)やウィークのイベント参加者に配布した。リーフレットの内容は「当事者」に向けたものではなく、関心のなかった人に気づきを与えることを目指し、「あなたにできるアクションがあります」と題した、本学の構成員の一人ひとりが日頃からできる取り組みを記した。

3年目となるパネル展では、前年度と同様の「いのちリスペクト。ホワイトリボンキャンペーン」と「KG RAINBOW PROJECT」に加えて、これまで本学が取り組んできたLGBTに対する取り組みを紹介するパネル展示が行われた。教職員からのメッセージである「KG RAINBOW PROJECT」は、これまでの西宮上ヶ原キャンパスだけでなく、神戸三田キャンパスと西宮聖和キャンパスにおいてもレインボーフラッグの掲揚とともに1週間展示され、

来場者から「すばらしい企画である」や「前向きな活動にいい刺激を受けた」といったコメントが多く寄せられた。

5月12日(火)の16:50から図書館ホールにて、当事者の学生たちが選定した米国の同性カップルが里親になろうとする際に直面する差別を描いた『チョコレートドーナツ』(2012年 米国)の上映会が開催され、学生や教職員25名が参加した。この映画の上映後には、本学のLGBTの学生からのメッセージを集めた5分ほどのビデオも流され、LGBTの直面する課題が遠い異国の問題ではなく、キャンパス内の日常のなかにもあることも併せて伝えられた。

またウィーク最終日の5月15日(金)には、前年度と同様に非公開の交流会が開催され、当事者やアライの学生(どちらも他大学の学生や高校生を含む)を開催し、キャンパス内でひと時の自分らしく振舞える環境の中で、横のつながりや情報交換が行われた。

## (2) 関学レインボーウィークオープニングイベント

2014年度はゲリラライブとして実施した非公式の啓発イベントを2015年度は公式イベントと位置づけ、5月11日(月)の昼休みに開催し、約250名の学生や教職員が参加した。複数のレインボーフラッグが立てられた会場の中央芝生では、学長及び院長からの挨拶のあと、ギターを持った関学の専任教員3人がリードし、ゴスペルサークルも加わって、参加者とともにウィークのテーマにあった楽曲を合唱した。ウィークのパンフレットとステッカーを受け取った参加者たちの中には、ステッカーをカバンや顔などに貼りながら合唱しているものもいた。もちろん、学内の当事者はカミングアウトしていない人も多く、このイベントに参加できなかった人がほとんどである。しかし、冒頭にあった学長や院長の挨拶など関学の公式行事としてこのイベントを開催し、大学として多様な性を受け入れていこうという姿勢を示したことが、多少なりとも関学の風土を変える一助になってくれることを願っている。

## (3) 言いたい放題セッション (非公開イベント)

ウィーク最終日の5月15日(金)の交流会直前の午後5時から、ツイッターなどの呼びかけに応じて参加してくれたLGBTやアライの学生6名によって、関学の現状や今後のレインボーウィークについて自由に語り合う「言いたい放題セッション」が開催された。これは、ウィークを単なるお祭りだけのイベントとして終わらせるのではなく、具体的に学内の風土や制度の改善点などを明らかにし、大学に働きかけるためである。参加者たちによって、ポストイットに書かれた意見からは、「パネル展のポストイットに“Well, being gay is hard. I wish I were normal.”と書いてあった。悲痛に感じた」や「日常(学校等)と性的指向を完全に住み分けてるときのあきらめ感」といった、LGBT学生の多くがキャンパス内で自分らしく振舞えない不満ややるせなさを感じていることが分かった。その背景としては、「ペアワークをやたら男女で組ませたがる」、「さん、くん、Mr.、Ms. で分ける」、「『最近ではLGBTとかの人もいますからね』と明らかに笑いを狙った言い方をしていた」、「好きな異性のタイプを聞かれると困る」といった、教職員や学生の多様な性への否定的な風土が指摘された。そして、レインボーウィークに関しては「私はレインボーウィークの存在を知って少し楽になりました」という意見がある一方で、「学校が取り組んでいるのは表向きだけで。自分自身の学校生活はよい状態ではない」や「関学という学校側のイベントなので、関学が関学を批判していくイベントにすべきでは」といった指摘もあり、こうした啓発的なイベントとともに、実際にLGBTの学生たちのキャンパス内での生活が改善するように具体的な制度や風土を変革することの必要性が確認された。

## (4) Web 調査

2015年度のウィークでは、言いたい放題セッション加えて、キャンパス内で学生や教職員がセクシュアリティを理由に具体的にどのような状況で困難を感じているかを明らかにするために、Web調査

を実施した(飯塚, 2015)。以下にその実施方法と調査結果の一部を報告する。

① 調査方法

本 Web 調査の概要は以下のとおりである。

- 調査対象：関西学院大学の在学生、大学院生、教職員（非常勤を含む）、卒業生
- 調査期間：2015年4月27日～6月9日
- 調査方法：Web上のアンケート調査サイトのURLや調査目的を以下の手段で広報した。
  - ▷ 大学の教学 Web サービスの掲示板
  - ▷ 関学レインボーウィークの twitter アカウントから告知
  - ▷ 調査協力のためのチラシの配布
  - ▷ 関学にある性的マイノリティサークルへ調査協力の告知
  - ▷ LGBTに関する講演会での口頭による告知

② 調査結果1 (被調査者のセクシュアリティ)

有効回答数は111名で、そのうち性的マイノリティ(当事者)58名、ヘテロシスジェンダー(非当事者)53名であった(表1参照)。

表1：被調査者のセクシュアリティの分類

	当事者(58)										非当事者(53)
	女性(35)					男性(23)					
出生時											設問11のカミングアウトの人数をきく設問にて「当事者ではない」を選択した人で分類をしています。また「わからない」と回答した人も含まれる場合があります。
性自認	女性		男性 X/他			男性		女性 X/他			
性的指向	女性	両性 性別を問わない その他				男性	両性 性別を問わない その他				
	レズビアン女性	バイセクショナル女性 その他女性	FTM	FTX /他		ゲイ男性	バイセクショナル男性 その他男性	MTF	MTX /他		
	7名	18名	2名	2名	6名	13名	4名	3名	1名	2名	53名

※ FtM= Female to Male の略で女性から男性(としての生き方)への移行者、MtF= Male to Female の略で男性から女性(としての生き方)の移行者、MtX,= Male to X の略で男性から性別を問わない生き方の移行者、FtX= Female to X の略で女性から性別を問わない生き方の移行者を主に指す。

③ 調査結果2 (学生からのセクシュアリティに基づく嘲笑的言動)

「学生から、性別、性的指向、性自認を嘲笑されるような言動をご自身が体験したり、見聞きしたことはありますか?」という設問のもと、「よくある」から「全くない」の4段階評価と、自由記述欄を設けた。当事者と非当事者に分けて集計したのが図1である。当事者の62.1%が、学生からセクシュアリティを嘲笑するような言動を受けたり、見聞きしたことが「よくある」あるいは「たまにある」と回答しており、本学において多様な性を享受する教育や啓発をしていく必要性が高いことが確認された。また、当事者の方が非当事者よりもそうした言動を体験したり見聞きした割合が高いことは、そうした言動がキャンパス内で行われているにもかかわらず、非当事者には気づかれず、見過ごされているという風土があることを表している。

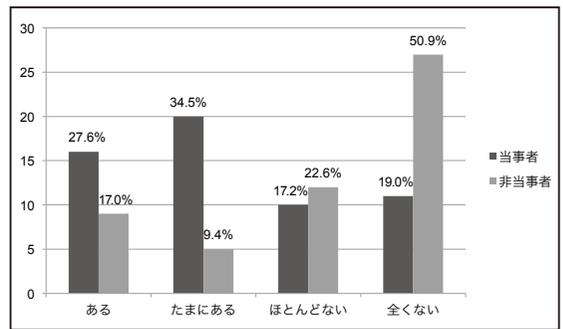


図1：学生からのセクシュアリティに関する嘲笑的言動の体験や見聞きの有無 (当事者の回答者58名、非当事者の回答者53名)

こうした嘲笑や否定的な言動の具体例として、以下のようなものが自由記述欄で報告された。

- 私の彼氏はFTMなのですが、その事を仲の良い友達に話した時、全否定されたこと。(女性/学生)
- 彼氏(周りには秘密にしている)と友達数人と話しているときに、彼氏と行ったカフェの話した時に「お前らゲイかよー(笑)」と言われてドキッとしました。バレルのは本当に怖いです。(ゲイ

男性 / 学生)

- 交流会や飲み会の場合、時には授業中のトークでホモネタや女装で笑いを取る、またそのような発言に対して、「お前ホモかよ」「俺（私）、女の子（男の子）好きやのに誤解される～」等の発言は何度となく聞いてきた。(FtX/ 卒業生)
- 友人同士で恋愛話をしてる際に（友人達は私の性的指向を知らない）「彼氏できなさすぎて、同性に走ったらどーしよー」と一人が言い出し、その場自体が話題に同調してみんなが笑うような空気になった。(レズビアン女性 / 学生)

#### ④ 調査結果 3 (教員または職員からのセクシュアリティに基づく嘲笑的言動)

「教員または職員から、性別、性的指向、性自認を嘲笑されるような言動をご自身が体験したり、見聞きしたりしたことはありますか?」という設問の集計結果をまとめたのが、図 2 である。学生からの調査的言動に比べると割合は少ないものの、当事者の 22.4% が、教員または職員からそうした嘲笑的言動を受けたり、見聞きしたことが「よくある」あるいは「たまにある」と回答しており、そうした体験は当事者のほうがやはり高いことが確認された。

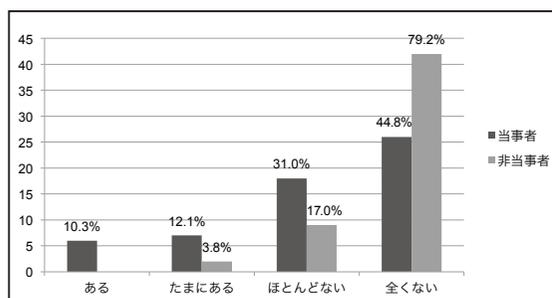


図 2: 教員または職員からのセクシュアリティに関する嘲笑的言動の体験や見聞きの有無 (当事者の回答者 58 名、非当事者の回答者 53 名)

こうした嘲笑や否定的な言動の具体例としては以下のようなものが自由記述欄で報告された。

- 教員控え室で休憩時間に雑談中、その場にはいない人の噂話にともなって「あの、コレっぽい」と

いう発言があり、片手の手のひらを頬の下でくねらせる動作を見た。(バイセクシャル女性 / 教員)

- 授業中に僕はゲイじゃないと笑いながらネタにするように言っている男性教員がいました。(バイセクシャル女性 / 学生)
- ゲイのことを、“あっち系”という呼び方で言われているのを聞いた。(FtM/ 卒業生)

#### ⑤ 調査結果 4 (キャンパス内でカミングアウトした人数)

「あなたは (関学内で)、LGBT 当事者以外の人に何人カミングアウトしていますか?」という設問に対する当事者の学生の回答をまとめたのが表 2 である。キャンパス内では、Web 調査に回答した当事者でさえ、半数の人たちが当事者以外の人たちにはカミングアウトできておらず、ここでも関学が多様な性に非寛容な風土があるという現状が確認された。

表 2: LGBT 当事者ではないと思っている人に対してカミングアウトした人数の割合

	実数	%
誰にもカミングアウトしてない	28	48%
1人	3	5%
2人	4	7%
3人	6	10%
4人	2	4%
5人	1	2%
6人	2	3%
7人	0	0%
8人	1	2%
9人	0	0%
10人以上	5	9%
わからない	6	10%
合計	58	100%

## 5. 今後の LGBT 学生の取り組みにむけて

本稿では、関学レインボーウィークの開始の経緯やあゆみをふりかえり、その効果や課題を明らかにしてきた。試行錯誤の連続で 3 年間開催してきた関学レインボーウィークであるが、「大学で LGBT の

存在をオープンにできるだという事実が凄く嬉しかった。レインボーフラッグがとても輝いていた」や「私はレインボーウィークの存在を知って少し楽になりました」といったコメントに見て取れるように、一部の当事者たちにとっては心理的サポートの効果はあったようである。また、一部の非当事者の人たちにとっても、ウィークを大学の公式なイベントとして位置づけ、多様な性を受け入れていこうという姿勢を可視化する試みを通して、以下のレインボーウィークに対する感想のように、一定の啓発や学習の効果はあったことが見受けられる。

・・・LGBTに関する問題に力になりたいと思っても、アプローチ方法がわかりませんでしたので、とてもよい機会だと思いました。自分が何故カミングアウトされないのかという理由も含めて、もっとLGBTに関して考えを深めていきたいです。

LGBTの当事者ではなく、カミングアウトもされた事のない人間ですが、・・・常々力になりたいと思いつつも、どうすればよいかわからなかったため、私にとってとてもよい機会になりました。まずはレインボーシールを貼ることから始めてみます。

しかしWeb調査の結果からは、性的マイノリティであることを理由に被る困難やハラスメントが、キャンパス内において学生あるいは教職員によって日常的に加えられていることがわかった。特に大学の授業内での性的マイノリティという属性そのものの否定や嘲笑やハラスメント的な発言が行われている現状は、当事者学生から安全な教育環境を奪い、本学が教育機関として責任を十分に果たしていないことを表している。また、当事者と非当事者の間では、何が嘲笑的な発言かについての認識の差があり、非当事者が意図せずして当事者を傷つけていることが見て取れた。こうした現状を改善するには、全教職員に対して性的マイノリティに対す

る理解を促す研修などを設ける必要があるであろう。多様な性のあり方を個人的に支持するしないではなく、本学で学び、働く人たちの人権擁護という視点から、対人関係上で必要な最低限の知識を身に付け、ハラスメントが行われない「安全な学習または労働環境」を構築していく必要がある。

関学レインボーウィークでは、この数年キャンパスの「風土」を変えることを目指してきたが、言いたい放題セッションでの「学校が取り組んでいるのは表向きだけで、自分自身の学校生活はよい状態ではない」という当事者の学生の声に真摯に向き合い、キャンパスの「風土」を変える試みと同時に、たとえば性別限定のトイレや更衣室の改善、授業評価アンケートの性別欄の廃止など、多様な性を尊重する施策や制度に変えていくよう働きかけていくことが不可欠である。

関西学院大学では、コミュニティに集うすべての者は、性別、年齢はもとより、国籍、人種、民族、出生地、主たる言語、宗教、信仰、身体的・精神的特徴、セクシュアリティなどの違いを尊び、「多様性(ダイバーシティ)」こそがコミュニティの強さであるという、インクルーシブ・コミュニティ宣言がなされている。さらにいえば、関西学院大学のスクールモットーであるMastery for Serviceの観点からも、学院に関わるすべての人たちの多様性を尊重し、インクルーシブなコミュニティの実現のために、風土とともに制度の変革を求める活動が重要となってくる。

## 参考文献

阿部潔 (2014) 「〈動向〉「当事者」たちの「声」から見えてきた人権教育の課題」『関西学院大学人権研究』18, 15-19.

阿部潔 (2015) 「〈動向〉第二回関学レインボーウィーク『もっとカラフルな関学に!』を振り返って」『関西学院大学人権研究』19, 57-59.

日高庸晴 (2014a) 「LGBT 学生の存在を考える：キャンパス内でのダイバーシティ推進のために」『大学時報』63, 76-83.

日高庸晴 (2014b) 『子どもの“人生を変える”言葉があります』平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業. [http://www.health-issue.jp/teachers\\_lgbt\\_survey.pdf](http://www.health-issue.jp/teachers_lgbt_survey.pdf) (確認年月日 2015 年 11 月 24 日) .

飯塚諒 (2015) 『関西学院大学 LGBT ウェブ調査報告書～性的マイノリティをめぐる学生・教職員の声～』関西学院大学人権教育研究室 .

加藤慶 (2008) 「LGBT 学生支援のアクションリサーチ」『解放社会学研究』22, 93-101.

河嶋静代 (2015) 『平成 26 年度ジェンダー問題調査・研究支援事業報告書』北九州市立男女共同参画センター・ムーブ .

佐倉智美 (2010) 「性的マイノリティが学校で直面する問題：当事者の語りの中の学生時代から」『日本教育社会学大会発表要旨集』62, 442-443.

魚橋慶子 (2009) 「性の多様性に対応する人権教育の考察：大学教育への提案」『東北学院大学教育研究所報告集』9, 49-62.

ヨシノユギ (2007) 「大学におけるジェンダー・セクシュアリティ課題の現在：立命館大学の事例から」2007 年 6 月 10 日日本女性学会報告 <http://www.arsvi.com/2000/0706yy.htm> (確認年月日 2015 年 11 月 24 日) .